
空の境界線

相坂 穂波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の境界線

【Nコード】

N05221

【作者名】

相坂 穂波

【あらすじ】

——また明日。お前たちと笑いながら再会できるのであれば、この命を懸ける。彼女が夢見た世界。それを守るために俺は戦うと決めた。【空の境界線】この空には人を隔てるものなど引かれていない。だけど、星の驚異と戦争に翻弄される少年たち。大切なモノを奪われ、同時に大切なモノを奪ってしまった。彼らのキズナを断ち切ったのは悲痛な争い。もどかしいばかりの恋模様や友情。反逆者の汚名を着ようと祖国を守った愛国心や大切なモノを守るため命を賭する少女のココロ。沢山の“夢”がそこにある。抱いた想いは違

えども、夢見たモノは誰もが同じ。彼らの夢は、手を伸ばせばそこにある――

空の境界線

数時間前まで平和な紺碧色の空だったはずが、今では平穏な景色など失われている。

都市のあちこちから上空に放たれているのは、対空機銃や高射砲による対空砲火。

蒼穹を覆い隠すのは飛空艇による艦隊。数多の戦艦は空に静止を続け、放たれる砲撃は雨霰。

これは……戦争だ。

爆発音と砲撃、銃声や兵士たちの叫びが大気を震動させる。都市攻略のために幕を切って落とされた作戦の前に、都市には阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっている。

戦場のオフィス街に、背中まで伸びた亜麻色の髪を優雅に、そして繊細に舞い踊らせながら疾走を続ける少女が居た。

すると、味方である戦艦から放たれた一発の砲弾が横切ろうとしていたビルに直撃されて、上層から瓦礫が降り注がれてしまう。

「どこ見て撃ってんのよっ。デカブツのポンコツ！」

今にも戦艦に向かって石を投げ付けかねない少女だったが、悪態を吐きながらも疾走を続ける足は絶対に止めない。

眉狙を寄せ、鬱憤を募らせながら瓦礫の雨を強行突破する。
横幅の広い道路なのだが少女は最低限の動きで落下物を避け、直線軌道を刻む一本の矢のように。

「撃った奴！ 絶対に、ぜーったいにつ、後で砲弾の代わりに詰め込んでどっかその辺に吹っ飛ばすから覚悟しなさいよ！」

瓦礫の雨を避ける事など動作もない。しかし、不可抗力だろうと少女の激昂は治まるどころか大爆発と大炎上を広げてしまう。

縛り上げた砲撃手を筒の中に詰め込み、敵陣にでも吹き飛んでもらわなければ。

それを想像すると少女は作戦中だというのにゲラゲラ爆笑する。

「リリア！ 笑っている暇があったら速度を上げろ、このままだと隊長を見失うぞ！」

戦場で不気味な笑いを続ける少女――リリアは、後ろを走っている総勢四十三名もの仲間たちに不満を愚痴られた。

それでもリリアを追い抜こうとする者は居ない。副長であるリリアの前を走れるのは隊長だけで、三席から四席と自分よりも強者の背中だけを信じて追い掛ける。それが、この部隊の掟。

リリアにとって今日は特別な日なのだ。

仲間の背中に守られながら最後尾を走っていたのは今では遠い過去のよう。やっと憧れの背中を誰よりも近い場所から眺める事が出

来る。あの背中に手を伸ばせば触れるかも知れない。

副長就任だ。

「うっさいっ。あんたら下っ端が副長さまに逆らうなんて千年飛んで十四年も速いのよ！」

リリアの勝ち気な態度に仲間たちは顔を引き攣らせるが、その心情を読み取ると穏やかな笑みに。

すると、全員が視線の先に敵の姿を捉える。

道路はバリケードで塞がれ、大きな交差点には町の中心部だからといって数多あまたの兵士たちがリラックスしている。

「リリア、号令だ！」

後ろの男性。以前まで副長を務めていた事から就任したばかりのリリアに激を飛ばす。

「うっはーっ。これ言ってみたかったんだよね」

満面の笑みを浮かべ、リリアは疾走を続けながら背中の長剣を抜いた。それを合図に仲間たちも武器を構える。

「撃たれようが斬られようが止まった瞬間に後ろの誰かが死ぬ！足を止まるな、振り返るな、死んでも走れっ。死ぬような間拔けな奴は隊の掟で死刑執行そのまま地獄に堕ちろ！」

それが戦争中だろうとリリアの声は弾み、顔には喜色が保たれている。

後ろの仲間たちも歴戦の勇者を物語るかのように、敵陣のど真ん中だろうと怯える者など一人も居ない。武器を片手に、解き放たれた魔獣のように獐猛な殺意を滲ませ、立ち塞がるものを蹂躪する。

「軍団旗！ 鬼神とオーガ隊の登場をあそこの馬鹿あほ間抜けオールスターに教えてやるのよ！」

最後尾の者は旗持ち。

今を“生きる伝説”と世界中にその名を轟かせるオーガ隊の登場を、敵勢に知らせるため最後尾の者が深紅の旗を翳す。

此処は都市の中心街。幾重にも張り巡らされた布陣に守られているはずの場所で、リリアたちの接近に気付いた敵勢は愕然とする。あのようなちんけな布陣の前に血肉を喰らうオーガ隊の足が止められるはずがない。オーガ隊の参戦によって既に前線は崩壊させられ、一本の矢は敵の司令部だけを狙っているのだ。

オーガ隊の旗に前方の兵士たちは戦慄させられ、激昂する指揮官の叱咤が飛び交った事で正気を保つと射撃が開始された。

リリアは長剣で銃弾を弾きながらも、琥珀色の瞳には隊長の後ろ姿だけが映されている。

緩やかな曲線美を描いているのはウェーブが特徴的な金髪。柔らかな毛先が背中につかり合わせて優雅な後ろ姿を見せ付け、部隊

員に絶対の安堵感と孤高の極みを教えられる。

しかし、前方からは血肉を喰らう鬼神の登場としか見えていないだろう。戦慄させるのは圧倒的な威圧感と殺意だけ。隊長は本物の鬼をも付き従わせる女性だ。

「リル！」

先頭で疾走を続けている隊長は手に持つ鞘から太刀を抜き、リリアの副長就任を祝うかのような激を飛ばす。

「その眺めは世界で二番目に近い場所から地獄を眺められる。だからって悠長な真似しやがったらロレンスんところの人形はどんどんよじ登っちまうよ！」

激励というよりも、挑発に近いものがあると後ろの仲間たちは苦笑する。リリアをあの子と比較するなど火に油を注いでしまうようなものだ、と。

「あんな唐変木のウエンディなんかと比較しないでよ！」

銃弾の嵐に曝されているというのに、リリアはあーだこーだと不満を爆発させてしまう。

すると隊長からも仲間からも笑われ、隊長は走りながらも抜き取られた太刀を横に、垂直に翳す。

今を生きる伝説。

不死身のレブロと、鬼神と恐れられる隊長の後ろ姿だけをリリア

は追い続けていた。

何人たりとも鬼神の前に立つ事は出来ない。なぜなら、鬼神が駆ける道に立ち塞がる障害物は業火の炎に焼き払われるから。

隊長が手にする太刀が戦鬪の火蓋を切って落とす。敵を蹂躪する鬼神は戦場だろうと闊歩を止めない。止めれる者など居ない。

太刀は血に染められたかのような朱の刃で、生き血を求める牙となって横切る敵兵の首を刈る。そして最後は全てが焼き払われる。

憧れの存在だ。

いつか絶対にあの後ろ姿を追い抜いてみせる。それがリリアが掲げる目標なのだ。

孤高の存在と、孤高の高さから世界を見渡すために、世界から最強と見上げられるためにリリアは剣を手にする。

それが戦う理由だ。

序章・人間爆弾投下数秒前

第101要塞都市。それが大都市マリージョアだ。

“外敵”からの襲撃に備えるため四方を巨大な外壁で囲まれ、総人口は数百万規模の経済都市でもある。

市街には数多の買い物客で溢れ、この非常事態とも言える世界に居ながら笑顔が絶えない都市。

高層ビルが立ち並ぶのは都市の中心部。住宅街に足を運べば平穏な町並みが広がっている。

夜になれば街灯や繁華街のネオンに照らされ、たとえ夜空の闇だろうと空襲に備える無数のライトに照らされたらあつという間に切り裂かれてしまう。ライトに照らされながら空を漂う巡視挺の姿など威風堂々たる威圧感だ。

「折角の青空に巡視挺は勘弁してほしいな」

その少年、イツキは公園のベンチから空を見上げて長嘆する。

紺碧の空に漂っている綿菓子のような雲を無骨な光景にするのは何時も決まって飛空挺なのだ。

軍に憧れを抱いている者ならカメラ片手に街中を駆けずり回るのが、イツキからすれば邪魔物以外の何物でもない。

イツキの服装は軍服姿だ。上着は黒で、ズボンは灰色、黒のブーツを履いている姿は兵士の証。

通常の兵士であれば赤のスカートの着用を義務付けられているのだが、イツキのスカートは青だ。

それを首には巻かずお洒落感覚から左腕に巻いてはいるものの、首が締め付けられる軍服は好きになれない。

そろそろ鬱陶しいものを感じつつある黒髪を散髪しようと思いついても、面倒だからまあいいかと終わらせる。それがイツキだ。

イツキは足を伸ばしながらベンチにぐったりと寄り掛かると欠伸を吐きながら頭を掻き、空いている手で窮屈な襟元をだらし無い格好に。

空を見上げていると、

「平和はいい事じゃね。いっちゃんもアイス食べるか?」

「悪いな、リンク」

イツキの右隣りに座っている少年。リンクは棒が二本付いている氷アイスを半分に折ると、それを手渡された。

イツキと同様に青色のスカートを左腕に巻き、軍服姿だということにお洒落に気を遣っているリンクの姿は驚きの連発。

派手にセットされた金髪だけなら未だしも、茶色のサングラスを初めてして幾つものピアスと、ネックレスや指輪などのアクセサリをじゃらじゃらと嵌めているのだから。

軍人氣質たる将校にでも目撃されたら顔を真っ赤にさせて激怒するだろうリンクの格好は、時代の流れとも、はたまた若者の象徴とも言えるものがある。

リンクは農業地帯からの移住民という事あってか、大都市マリージョアで生活を始めてから日に日に派手な姿に変貌するのは田舎の若者が都会に憧れる“あれ”と同じだろうとイツキはアイスを口に銜えながら納得する事に。ただ、モデル顔負けの美男子だというのに、奇妙奇天烈な方言は色んな意味で致命的だ。

そんなリンクと肩を並べながら冷たいアイスに満足していると、今度は左隣りの少年、ドミニクが不満そうに愚痴る。

「お、俺にはないのかよ？」

長い茶髪が特徴的なドミニクは問題児と噂される三人組でも唯一の常識人で、それに加えて高身長に眉目秀麗な美男子ときたらなんて嫌味な奴なのかとイツキの苛立ちも募るばかり。

それでも左腕には青色のスカーフが巻かれているので、一応は我慢してやる事に。

華麗に無視するイツキの傍ら、隣のリンクが代弁する。

「ハゲ教官に媚びた裏切り者のモグラなんか土でも耕しやがれ、じやんね」

「まだ不貞腐れてるのかよ。あの時、俺が機転を利かせなきゃお前ら二人とも」

「だがアイスはやらん」

言い訳がましい言葉をイツキが無慈悲に制すると、ドミニクはグ

ツと怒りを堪えてアイスを見詰めてくる。

嫌な予感というものはどうやら天気予報よりも当たりやすいように、咄嗟にアイスを上に掲げて回避すると脳天気にも飛空挺を見上げていたリンクのアイスはドミニクの口の中に消えてしまう。

当然の事だがリンクは、

「ああっ。俺たちのアイスが！」

「恩知らずのお前が悪い。はははっ、ざまあみろ」

「てめえっ。俺たちはボンボンとは違って貧乏人じゃんね！　アイス代返せ！」

とまあ、こうしてリンクとドミニクが取っ組み合いの喧嘩を始めるのは日々の日常であって、毎日の日課でもある。

ドミニクの実家は国内屈指の名門家系、良家だ。レイアス統一政府の軍上層部で存在感を強める父を持つドミニクは当然のように富裕層で、対照的にとある病気を患う母親とやっこの思いでマリージョアへの移住許可を得られたリンクは当然のように貧困層だ。

自分はどうかと言えば両親は既に他界。遺された家に独りで生活が続けているが、国から馬鹿げた金銭感覚の補助金と支給金を受けているので生活費に工面する必要は一切ない。しかし恵まれているのかと尋ねられたらイツキは首を横に振るだろう。

そもそも、どうしてあの三人はいつも一緒に居るのか噂される家庭内事情だ。

二人の口論を冷ややかな視線で見守っていると、どうやら明日の昼食をドミニクが奢る事で決着が付いたらしい。

考えるよりも先に拳が先走ってしまうほど単純なリンクだ、昼食代が浮いた事で無邪気に喜びながらベンチに腰を下ろす。

ドミニクは、ベンチの前に塞がる手摺りを握りながら丘の公園に広がる景色を感慨深そうに一望していた。

「この都市は本当に平和だよな」

ベンチからもマリージョアの景色を眺める事は出来ている。

イツキは最後の一口を頬張ると背もたれに腕を広げながら嘆息する。平和な町並みを眺めながら。

「都市の外では教団の過激派組織による過激なテロリズム。それに付け加えて“星の胎動”に世界中がてんやわんやの大騒ぎ。危機的状況とはいえ、この都市で生活していると別世界の話だな」

要塞都市の周辺一帯は世界の激動とは別世界の平和と秩序が保たれている。リンクとドミニクの三人で遠方に出掛けては、その度に現実を突き付けられ、マリージョアが如何に平和なのか思い知らされてしまう。

「いっちゃんは楽天主義者じゃんね。俺っちの生まれ故郷は星の胎動の所為で焼け野原だし、禁種とは金輪際出会わないよう祈るじゃんね」

「ミストにクリーチャー、か」

世界中を巻き込んだ大戦を隔てて、大国同士が停戦協定を結んだ事で平和な世の中になると世界中が安堵したのは数年も前の事だ。しかし均衡を破ったのは国でも人でも亜人種でもなかった。それが“星の胎動”と呼ばれる驚異。

リンクはベンチからドミニクの隣に歩を進めると、手摺りに背中を預けながら言を紡いだ。

「ワンころ同士の縄張り争いみたいな戦争に、星さまが怒ったんじゃないね」

「星霊信仰を促すような言い方は止めろよな。たくっ、いつから教団の手先になったんだよ」

この中で誰よりも星の胎動の恐ろしさを理解しているためか、普段ならドミニクの棘のある言葉に噛み付くのだが。

喧嘩っ早いのが少々どころか大問題のリンクでも、星の驚異には赤子同然。過去に触れればリンクの顔には陰が広がり、それを振り払うかのように話の流れを変え、ごまかす。

「そういえば俺たちの故郷が襲われた時に、あの有名な道化の死神に遭遇したっけ」

「禁種と死神のコンビかよ。生きてるだけ儲けものだな」

「いっちゃんの楽天主義は重症じゃないね。クリーチャーをバツバツサ切り伏せる道化の死神は人間じゃない。俺たちの友達もあいつに斬られたし。化け物じゃないね」

楽天主義とは言えそうにないイツキは、面倒臭がり屋でやる気のないただの日和主義だ。

しかしあの有名な道化の死神と遭遇したとは驚きだったため、悪たれ口を忘れて今も無事に生きているリンクの幸運を素直に喜ぶべきと感心する。

統一政府がもっとも危険視する最低最悪のテロリスト、道化の死神に出会えば次の瞬間には自分の首が地面に転がっていると恐れられる人物なのだから。

イツキの感心を余所に、前屈みで手摺りに寄り掛かっているドミニクの反応は別だった。

「最低最悪のテロリストなんて恐れられているけど、マリージョアを襲撃しやがったら俺が仕留めてやる。それに教団支配に甘んじている国と信者と思想もろともな。じゃないとこの国は星にも、歪んだ思想にも飲み込まれっちゃう」

国に忠誠を誓い、愛国心の塊とも言うべきドミニクを憤慨させるのは過激なテロリズムの数々。

星霊信仰を掲げる教団本部の直接的な関与はないとされているものの、過激派組織は女子供だろうと無抵抗な者だろうと『星の怒り！』と称して無慈悲に殺害する。ドミニクでなくても怒りを覚えるのは当然の事なのかも知れない。

「モグラは即上級士官か。将校入りなんて羨ましいじゃね」

「その時は猿を顎でこき使ってやるから安心しろよ」

「絶対にお断りだし。俺っちは農作業で十分じゃんね」

ケタケタ笑いながら喧嘩をする二人を平和なものだと欠伸を吐きながら見守っていると、俄然ドミニクに話し掛けられた事で眠気は去ってしまう。

「卒業したらイツキはどうするんだ？ 親父さんの跡でも継いで学者に？」

「ふざける。俺が英雄って柄か」

「いっちゃん英雄なら俺っちは正義の味方か創造者じゃんね」

この歳で正義の味方を夢見るリンクには手を広げながらやれやれと呆れ果てるが、ドミニクは依然として真面目な面持ちだ。

「英雄視されている親父さんのために、兄貴が落としたエルリック家の名誉を挽回するチャンスじゃないか」



戦争孤児だったイツキには過去の記憶が少ない。というか過去を振り返るのを脳が無意識のうちに拒んでいるから。

餓死&凍死寸前だったイツキは幸運にも今は亡き養母に拾われ、エルリック家の家族に迎え入れられた。そんなエルリック家は、激

動する世界を乗り越えるため、同盟国を一つの旗の下に治めた事で生まれた“レイアス統一政府”建国の父として有名だった。

有名な家系で、それも養父であるガーリット・エルリックの名を知らない者など世界中どこを見渡しても存在しないだろう。なぜなら星の胎動とその危険性を解明したのはガーリット・エルリックその人で、今日に築き上げられた予防策の数々や、ありとあらゆる分野に精通していたガーリット・エルリックによって世界の文明レベルが底上げされたのは誰もが認める天才だからこそ可能な偉業だ。

世界が熱狂した演説がある。

『星の胎動の最大の原因は人類そのもの。徐々に発生を始めた異常災害の数々は星からの警鐘で、既にタイムリミットは過ぎてしまった。それを裏付けるのが古代種——メギド（星の驚異）の出現だ。

星と生物が相互に関係し合い環境を作り上げている事がある種の“巨大な生命体”と見做せば、メギドの出現も胎動もそれは“自己規制システム”と呼べる。

星と生物の関係は人と細胞組織の関係と酷似するもので、その相互作用が既に崩壊しているのだ。人体がウイルスに感染されたら細胞組織がウイルスの増殖を抑えようと、免疫系の活性化を促そうと発熱を開始するのと同じ事だ。

そして創造魔法の源とされるライフストリームの異常発生は、星の胎動を活性化させる発熱作用と同じで、メギドはウイルスを死滅させるための抗菌作用だと言えるだろう。

共存の道が閉ざされているのであれば、狂った自己規制システムを修正するために星を淘汰しなければ我々に未来はない！

星そのものを、人が、神の領域に、自立進化の可能性を求めて。人類の繁栄が体内の細胞組織が異常増殖と同じ事なら、老廃物を駆除するのはシステムの一貫。それを行うのは人であるか、人を構成する細胞組織であるかどうかの熾烈な生存競争が始まったのだ！』

このガリット・エルリックの演説が遠い過去のものなら何とも独善かつ自分本位な淘汰論かと非難されるだろう。

しかし、今その時の驚異に晒されている国民や国々は『星との全面戦争』を選んだのだ。

ガリット・エルリックの演説を全面否定したのは星霊信仰を掲げる教団で、それによって信者や教団支配を受ける国々と摩擦が生じた。過去のラグナ戦役と呼ばれる大戦も、レイアス統一政府と教団を中心に世界を巻き込んだ戦争なので、今まさに和平協定が破棄されてしまいそうな一触即発の危機に暗い影が……。

そして、名誉と名声を極めたエルリック家を奈落のどん底に突き落とした二つの事件が起きた。

一つ目はガリット・エルリックの暗殺事件。

二つ目はその数年後に起きたイツキの兄——ジル・エルリックの反逆行為だ。

父の死後、軍の機密と星の胎動に関する研究の数々を引き継いだ

ジルは、何を思っただの行動だったのか、国家機密を持ち出して国外に逃亡を謀ろうと目論んだ。結果、ジルは身柄を拘束され、その最高機密は国外へと流出された。

英雄のガリット・エルリックと重罪人のジル・エルリック。

ドミニクとの先程の問答は自分を氣遣ったの言葉だとイツキは十二分に理解している。

英雄の父を英雄と褒めたたえる者が居れば、国家反逆者のジルを忌憚する者は溢れるほど居るのだ。当然のように保守派や国粋主義者から弾圧され、養子でありながらエルリックの姓を持つイツキの立場はシーソーゲームのように不安定なもの。既に処刑されてしまった兄の情報を求め、二次被害を恐れた軍や公安に身柄を拘束される可能性すらあるほどだ。

「ドミニクは心配性なんだよ」

イツキは缶ジュースの中身を飲み干すと、独白しながら空き缶をゴミ箱に放り投げた。空き缶は甲高い音を鳴らしながらゴミ箱に。

青空に背伸びをしながら欠伸を吐き、疲れた身体を早々と休めた
い一心で帰路に着いた。

学者だった父は人込みを嫌っていた。余程の事がなければ来客はないだろう丘の上に、エルリック家は物寂しそうに建っている。背後には鬱然と広がる森があって、交通には不便な場所だ。

無言のまま、淡々と帰路を進むと数刻後には丘の麓に到着する。

丘の頂上目指して伸びている石造りの地面を歩きながら町の風景を見渡すと、人込みで溢れる繁華街や高層ビルを視界に捉えた。同時に世界から根絶されているかのような丘に孤独感を抱いてしまうが、柄にもない感傷に浸るのは暇を持て余す老後のために取っておこうと考えるのを止めた。

父の名誉を汚したジルを恨んだ事など皆無だ。善き兄で、イツキは今でもジルを尊敬している。

どうして反逆行為に走ったのかは知る由もないけど、戦争孤児だった自分を家族として迎え入れてくれた兄や、本当の息子のように愛してくれた両親は、どんな事になろうと大切な家族なのだから。

坂道を登り続けるとそこに到着する。

木造建築の二階建て。丘の頂上に家は建っていて、背後には自然公園に繋がっている広大な森が広がっている。

この家を守るのが自分に出来る唯一の恩返しなのだろう。そんな事を考えながら石造りの通路を最後の踏ん張りだと気怠そうに歩いていると、俄然イツキはそれに気づいてしまう。

「戦艦？ … マジかよ、リヴァイアサン級の戦艦がどうしてまたマリージョアなんか」

イツキの瞳が捉えたものは巡視のための飛空艇とは桁が違う。幾つもの砲が取り付けられた巨大な、それも空飛ぶ要塞のような大型

戦艦だ。

その形状は楕円形と言うのだろうか、丸みを帯びてはいるが威圧感がまるでちがう。

浮力に特殊な装置を使用しているため、余計な翼は必要ない。推進力に用いる幾つものジェットエンジンと進路変更に使用されるプロペラ。砲の数を数えるなど暇人のする事で、爆撃にも追撃にも圧倒的な破壊力と無慈悲な攻撃を有するリヴァイアサン級の大型戦艦は、要塞攻略だろうと平然とやってのける。

空から放たれる威圧感は青空を遊泳する恐怖とも言えるだろう。

そもそも、リヴァイアサン級の大型戦艦など戦争から掛け離れているマリージョアには配備されていない。巡視艇とKFLと呼ばれる二人乗り用のバイクのみ。外壁に無数の対空砲が取り付けられているとはいっても、第101要塞都市は平和が謳い文句なのだから戦火に巻き込まれた事など一度たりともないのだ。

「あんな馬鹿デカイのが本当に空を飛んじまうんだから、凄いな。補給か？ ……それにしちゃー護衛されているような」

あんなもので何隻も押し寄せられたら戦意喪失どころの騒ぎではない。ズボンで代用された白旗を必死に振りかざして全面降伏するだろう。きっと。

統一政府最高峰の規模を誇っている、リヴァイアサン級の戦艦など見た事がなければ乗った事もない。男に生まれたからには大型戦艦に憧れるというもの。数ヶ月前に行われたテロリスト掃討作戦ではリヴァイアサン級の戦艦が五隻も召集され、その規模と布陣の前

にはもはや戦いにすらならなかったとか。

そんな大型戦艦がどうしてマリージョアの空港に停泊しようとしているのか、思慮を深めても答えが定まらない。摩天楼のような高層の空港周辺には大型戦艦を誘導する小型挺や、それを警護する巡視挺とKFLバイクの数々が空を遊泳している。

何か大規模な軍事作戦でも展開されるのだろうか、はたまた補給のために立ち寄ったのか、兎にも角にも空港の上層付近に停泊しようとしている大型戦艦の姿には、きつとリンクやドミニクも同じように興奮している事だろう。

高揚する心を思う存分弾ませながら驚喜を続けていると、それは忽然と開始されてしまった。

「こ、攻撃!？」

大型戦艦の右翼付近が内部から爆発した。翼が必要ない飛空挺だろうと連鎖的に広がれ爆発に浮力を失い、巨大な鉄の塊がけたたましい警報音を鳴らしながら右に傾き、そればかりかどういいうわけか大型戦艦から放たれた砲弾が周囲の飛空挺に次々と飛弾する。

破片に飲み込まれたり、爆発に巻き添えに遭ったりと何機ものKFLバイクが地上に落下を……。

「マリージョアに……テロ、か」

空港から距離は離れているものの、刹那に幕を切って落とされた襲撃。マリージョア全域に襲撃を知らせる空襲警報が響き渡る。

空港周辺からは尚も爆発音が都市に轟かされ、平和が謳い文句のマリージョアが阿鼻叫喚の世界に包まれる。

反乱なのか、敵の工作なのか、大型戦艦の砲撃によって一隻の巡視艇が炎上しながら地上に墜落すると、爆風と爆音に大気が震動させられた。

現実離れた光景にイツキはただ啞然とする外なかった。訓練とは違った空襲警報を耳に留まりながら戦火が拡大する空港の空を守るだけ。

イツキは兵士ではない。特別養成学校の生徒で、入学が困難な学校とはいっても実際のところはただの訓練生でしかないのだ。

突然マリージョアが襲撃されて迅速に行動できる訓練生は、きっとドミニクだけだろう。それだけ平和ボケに現を抜かしていたイツキは自分が何をするべきか、どう行動するべきかの判断力に欠けてしまっていた。

驚愕を続けるイツキは一機のKFLバイクを視界に捉えた。味方であるはずの機体や巡視艇に備え付けられている機関銃を放ちながら戦闘区域を離脱しようとしているものの、あの包囲網をそう易々と突破出来るものではない。

数機のKFLバイクに追撃されながらも徐々にこちらに接近を続ける敵のKFLバイクは飛弾したのか煙を放ち、最高速度を保ちながらエルリック家の上空に差し掛かる。――その時だ。

「ふざけんなア！」

敵の機体から“何か”が落とされた。もちろん戦争中に空から落下物があるとすれば『ラッキー！』とは絶対に言えないもの。

……爆弾物。

あたふたする、イツキ。

網で掬おうにも網などない。キャッチしようものなら木っ端みじんの真っ黒焦げになって悲惨な最後を迎えるだろう。

選んだのは、

「ぬおおおおお！」

逃げる事を瞬時に諦め、頭を抱えて地面にひれ伏す。爆発に備えて身体を丸めるのが精一杯の対処法で、落下物が何か判断する余裕すら失われていた。

しかし、待てども待てども一向に爆発する気配がなければ、何か落下した衝突音すら聞こえてこない。……もしや、時間差か？

どういうわけかと腕の隙間から家の上空を見上げると……またまたどういいうわけか重力の理を無視するかのようにな、“何か”がゆっくりと落下を続けている。

「なんだよ、あれ……」

うつすらと鮮やかな緑色の光芒を空に刻みながら落下を続けているものは、中央軍か連合軍の新型兵器だろうか。

すると、膨らむばかりの疑念に応えるかのように家の天井間近で遊泳を止め、突然急降下……。

「いにやあああああああああああああああ」

耳の穴をほじくっても女性の悲鳴にしか聞こえない謎の落下音にイツキの眉根が寄る。

落下物もとい謎の爆発物はエルリック家の屋根に衝突すると、まるで隕石でも降ってきたかのような衝突音が鳴り響き、屋根を破壊したのであろう落下物は二階の一室に姿を消してしまう。

「に、人間爆弾？」

なんて非人道的な最新兵器を開発しやがるのか。飛び降り自殺よりも悲惨な姿でバラバラに飛び散った人間爆弾を想像させると、背筋に悪寒が走って顔が蒼褪める。

普通の爆弾であってほしいと願ってしまったイツキは、現状を確かめようと駆け足を踏む。

向かった先は当然の事ながら家の二階で、イツキは何処の部屋に落下したのか部屋を確認しては、また隣の部屋に。すると廊下の奥の――自室から物音が聞こえた。

よりにもよって自分の部屋が爆撃されたかと最悪の想像を膨らませながら絡まる足をよろめかせ、自室の扉を開けた。

「お、俺の……俺の部屋がア！」

室内は見るも無残な姿に荒れ果ていた。天井裏の埃が部屋一面に漂い、一人暮らしを紛らわせるために始めた自慢の多趣味をこれでは自負する事も叶わない。

高価なトランペットやアンティークギターなどの楽器類は、年代物の貴重な書物や武器になるだろう分厚い辞典が納められていた本棚が倒れた事で……ぺちゃんこ。

食事や睡眠時間を削ってまで完成させた汗と涙の結晶体とも言うべき帆船や飛空艇模型や、古代の戦場を舞台にした一世一代の傑作品まで……ぺちゃんこ。製作開始時よりも粉々だ。

自室には実用性よりも鑑賞だけの作品を飾っていた事が悲惨な結果を招き、開いた口が塞がらないといった様子のまま両膝を床に落としてしまう。

「俺の……長年の苦勞が……」

リンクとドミニクからは引きこもり体質と嘲られようとも、製作部屋に閉じこもっては数多の趣味に没頭していたというのに、これではあんまりだ。こうなっては不発弾だろうと取り扱い注意の危険

物だろうと、ボコボコに殴ったり蹴ったり地中の奥底に半永久的に埋めてやらねば気が済まない。

憤怒の炎に燃え立たせるイツキは、くの字に折れ曲がったベッドを涙目で睨みながら落下物の正体を確かめようと立ち上がる。

「この爆弾野郎！ 戦争すんなら時と場所を選んでから落下しやがれ……れ？」

原稿用紙七枚は使用できそうな不満を大爆発させながら不発弾の信管に向かって抗議したが、あまりにも的外れな落下物を前に我が目を疑ってしまう。

落下物はどう解釈しても二足歩行が可能な人型で、手足の自由が奪われている拘束着と鉄仮面を装備した新型爆弾だった。

「痛たたたっ。やっぱり安物のベッドはダメダメだね。低反発しないもん」

と、不時着先のベッドに不満をぶつける新型爆弾は人語を放ち、驚愕というよりかは啞然としてしまう。音声機能搭載で、声音は少女だからだ。

胸の膨らみは標準サイズなのだろうが、最近の爆弾には胸に二つの膨らみを作るのが流行っているのか？ 標準装備ならそれによって破壊力が変化する？

「あれれれ、これは失敬しちゃったね。初めましてこんにちわっ。

という事で立たせてもらえると助かるんだよね。これ、スツゴく窮屈だから」

「爆弾が……喋った……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0522i/>

空の境界線

2010年10月9日04時28分発行